

北海道交運共闘が総会 交通運輸労働者の賃金・労働条件改善を

6月4日、北海道交通運輸労働組合共闘会議（略称・北海道交運共闘）の第12回総会が開かれました。総会では、三上友衛議長（道労連議長）が「道労連は最低賃金の引き上げを求めて運動を強めている。その一環で道庁への要請をおこなった。このとりくみは交通・運輸産業で働く仲間の賃金・労働条件を改善するためにも重要な運動である」とあいさつしました。続いて、幹事会を代表して吉根清三幹事が1年間の運動の経過・総括と新年度の方針について報告・提案したあと、各加盟組織から運動の到達点と課題について報告がありました。最後に、北海道労働局に対する「交通運輸労働者の労働条件改善に関する要請書」の内容について確認し、新しい役員を選出して総会を終了しました。建交労からは、森国委員長が副議長（＝再）、宮澤書記長が事務局長（＝新）、竹田執行委員（鉄道本部委員長）が幹事（＝再）に選出されました。

北海道鉄道本部 夏季一時金の交渉始まる

北海道鉄道本部は6月6日に夏季一時金の第1回団体交渉をおこない、JR北海道から概況説明がありました。令和5年度決算で、収入はコロナ禍前の令和元年度比99%までに回復したものの、北海道ボールパークFビレッジの開業と航空機利用者のアクセス輸送で千歳線利用が増加していますが輸送人員は89%にとどまっています。道内経済状況は緩やかな持ち直しと発表されており、今後の観光客増加による更なる列車利用が期待されます。建交労からは、要員状況も厳しい中で安全・安定輸送のために奮闘している社員と物価高騰により家計支出が増加する中で夏季一時金は毎月の生活を支える重要なものであり、とりわけエルダー社員の一時金を同一労働同一待遇の視点から改善することを求めてこの日の交渉を終えました。

2回目の団体交渉は6月12日におこなわれました。会社は現段階で示せるものはないとし、これまでの賃金に関する交渉時と同じく「会社が置かれている状況」という言葉を用いました。組合は「国からの支援は確かに受けているが、人材の確保は喫緊の課題となっており早期退職に歯止めをかけるためにも処遇の改善は必要だ」と、労働力の確保に貢献しているエルダー社員の待遇改善について、支給率に2分の1を乗じる条項の撤廃と再雇用を機に奪われた手当を相当を一時金支払い時に支給することなどを提起しました。春闘でベアを実施した際に斎藤国交大臣が必要性を語っていたように、国としてもJR北海道の処遇改善は大きな課題と認識されているのだから、国の顔色をうかがうことなく物価高騰から社員・家族の生活を守る支給率での支払いを求めました。

北海道鉄道本部が黄金沖で「カレイ釣り交流会」

6月7日に噴火湾・黄金沖でおこなった北海道鉄道本部のカレイ釣り大会は、参加者が4人と少なく交流会として開催しました。この日は天候に恵まれ、海は風で風もなく絶好の釣り日和でしたが、魚はいるのに釣れない状態でした。原因はカスベ（エイ）が異常発生して泳ぎ回っており、船の回りでイルカが跳ねる時も神経質なカレイは落ち着いて餌に食いつける状況ではなくなります。その証拠というか、室蘭支部の渡部さんが10kgを超えるカスベを3枚も釣り上げて疲労困憊の様子でした。地球温暖化の影響なのか、春先にはイワシが日本海で異常発生して海岸に打ち上げられ、積丹半島周辺の港内に大きな群れが入って海底は弱ったイワシで埋まりました。ホッケは最盛期にまったく釣れず、イワシが好物のヒラメが今年は絶好調に釣れるなど、北海道の沿岸にも変化が現れているようです。